

「茶湯書」の計量分析 —宗珠伝書—

矢野 環

埼玉大学理学部数学科

茶道書に計量分析（特に数量化Ⅲ・Ⅳ類）を適用することによって、これまで明らかでなかった様々な結果を得ることができる。ここでは茶人として著名ではあるがその茶湯の実態の不明であった宗珠伝書を3件決定する。そしてこれまで宗珠によるとされた『君台観左右帳記』大永3年奥書本は棄却される。この議論は信頼度の高い写本の発見に拠るところが多いが、その分析に当っては数量化理論無くしては行い得なかった物である。特に君台観左右帳記諸本の詳細な研究に基礎を置いている。

主な手法は2通りであり、キーワードを元にした校合を統計的に行うことと、順序づけられたリスト相互の類似度を共通部分の順位相関で測定することにある。

On a Quantitative Analysis of Books on Tea Ceremony

— Books by Murata Soshu —

Tamaki YANO

Faculty of Science, Saitama University

We apply a quantitative analysis (especially, quantification method type III and IV) for books on tea ceremony, and we get new results. We determine three books of secrets written by famous tea master Murata Soshu, whose way of tea ceremony have not been well known. The book formerly attributed to him dated Taiei 3rd (1523) is proved to have another origin. This study is based on both finding of reliable books and quantification method. Especially, we use an intensive analysis of Kundaikan-Sochoki. by the author.

Main procedure is: a statistic treatment of the comparison of sentences on key words, and measuring the discrepancy between ordered lists by order correlation.

1. はじめに

計量分析は既に人文科学の様々な分野で応用されている。しかし、芸道伝書の研究に適用

された例はこれまであまり聞くことがなかった。わずかに「君台観左右帳記」「文阿彌花伝書」「専応口伝」などである。茶華香道の伝書は通常の古典文学作品とは異なり、時期に応じて異なる内容の原本が存在し、さらに書写者による意図的な改変もあるために、ある一つの名称で呼ばれる伝書も総体としては複雑な様相を呈している。この為に、伝書の研究に関しては未解決の問題が数多く存在した。

そのような複雑な様相を呈する物であれば、計量分析（数量化Ⅲ・Ⅳ類等）を適用してこそその構造が見えてくると言う事がある。実際、座敷飾りの聖典『君台観左右帳記』、華道書『文阿彌花伝書』『専応口伝』に関しては、計量分析的手法が極めて有効であった[矢野 99]。ここではその結果を踏まえてさらに発展させ、茶道伝書として宗珠伝書の問題を取り扱う。

茶道は利休によって大成されたとされる。そして、「茶道開山」珠光の名もまた高い。しかし、珠光--○--紹鷗--利休 という系譜の茶湯に関しては豊富な研究があるものの、珠光跡目とされ、大永から天文にかけて「数奇者」として名高かった宗珠の茶湯については殆ど知られるところが無い。ここでは新出の3件の伝書が宗珠の茶湯を窺わせる物であることを示し、合せて従来宗珠本として取り扱われた『君台観左右帳記』宗敬本の「大永3年年紀は信じ難いことを示す。また、伝書を用い戦国時代末期の葉茶壺の分類を与えることができる。

この手法は、伝書における些細な特徴に注目するのではなく、全体としての類似性をみることによって、判断がより確実になるという利点がある。もとより、細かい記載の共通点あるいは相違点で注目すべきところがあるのも事実であるが、それはむしろ補助的に考えるべきものである。実際、これまでの伝書の取り扱いにおいて、本質的ではない細かい差異に幻惑されて誤った結論に達した例は多い。

2. 宗珠関連伝書

2.1 村田宗珠

わひ茶の祖とされる珠光が文亀2年5月15日に没した後、その養子であったという明窓宗珠（午松齋）が跡目となった。彼は「数寄の上手」とされ、その屋敷は「山居の体」「市中の隠」と評された。青蓮院尊鎮法親王との交際が深く、特に天文13年1月16日には「秘伝自能阿珠光一冊進之事在之」といい、それがいわゆる『君台観左右帳記 宗珠本』ではないかとも言われたことがある（その全体では無いが、該書の一部である可能性はある）。しかし、彼の茶風はその後広く受け入れられたものではなかったようであり、珠光から伝来した道具も暫時流出する。宗珠は永禄3年6月以前に歿しているが、天正5年頃には2代後の宗治所持とされる名物は「玉礪蘭の絵」「松風石」の僅か2件に過ぎなかった。

これまで宗珠の茶湯を偲ぶものとしては、不住庵梅雪による伝書、あるいは『棧敷に入る次第の事』といったものが指摘されていたが、いずれも江戸期転写本であり、確実なものではなかった。ここでは、室町写本を基準に取り、より宗珠伝書として確実なものを決定する。その副産物として、従来宗珠本として取り扱われて来た「君台観左右帳記」の一本は、その全体が奥書の主張する大永3年に宗珠によって著されたものとは認め難いことも示される。

2.2 対象写本

ここで取り扱う写本は、表1の8件である。この内1,2,3,7,8はこれまで指摘されたことがなく、特に1,2,3が宗珠伝書と認められる新出のものである。「彫・土・壺・台」はそれぞれ「彫物（漆工）・土物（天目・茶碗）・葉茶壺・台子（寸法・手前）」の項目の有

無を示す。記号の○△□はそれぞれ内容が異なり、又同じ記号は内容的に近接している事を示すものであり、記述が完全に一致しているということではない。写本の詳細は[矢野 99]第2章の対応する解題番号(表の「解題」)を参照されたい。

略号	書名	解題	時期	書写	書写者	彫土壺台
1 [大谷大b]	君台観左右帳記	120	大永4	天文5頃	宝輪院宗諱	○
2 [宗珠蛭川]	茶湯道具事書	119	大永3	天文永祿	蛭川親世	○ ○ ○ ○
3 [茶湯図]	茶湯図	164	永祿?	江戸初期	(名物図含)	○ ○ ○
4 [古伝書]	習見聴諺集	3et	天文?	永祿期	光明院実暁	△ △ △
5 [珠光庵]	珠光庵秘本	136	戦国?	戦国?	茶書と	□
6 [宗珠宗敬]	君台観五卷書	123	大永3?	江戸初	五冊目後半	□ □
7 [杏雨]	君台観荘牒	122	天文13	安永7	前書と共通な座敷飾のみ	
8 [座敷飾]	座敷飾	195	戦国?	江戸	「使用謡」宗珠史料を認識	

表1. 宗珠に関連した伝書類
Table 1. Books related with Soshu

この1-2,5-7が宗珠奥書をもつ伝書である。4は特に系統が定めがたく、宗珠伝書として取り扱うものではないが、永祿期書写の古い茶湯伝書である。以下の検討により3は内容的に宗珠流茶湯書と判断される。6はこれまで「君台観左右帳記宗珠本」として知られる物であり、この座敷飾の部分は7と等しく、彫物は5と等しい。但し本書は後に示すように大永3年に成立したとは思えない。8は宗珠の資料をを承知してありがたい使用謡である。

ここで1,2,5-7に宗珠奥書があるとはいえ、それらの内容の成立期は検討を要する。そこで、以下では次の方針で写本の近親性を決定することとする。なお、次節からの解説では統計処理にかかわる(1)(3)のみについて説明する。

- (1) 1と2の彫物部が、内容的に共通性が高い事、並びにそれと5,6の彫物部は全く異なっていることを数量化Ⅲ類を援用して示す。ここでは写本がサンプルであり、カテゴリーは彫物の解説文に現れるキーワードである。
- (2) 2と3の土物部が、内容的に共通性が高い事、並びに5の土物部は全く異なることを見る。これは文章そのものによる。
- (3) 5の画人録は、珠光から伝授されたものとは言いがたいことを、数量化Ⅲ,Ⅳ類を用いて示す。ここでⅢ類の適用においては、画人が写本に出現すれば1,しなければ0としたデータを用いて記載画人の特徴を見る。次に、画人記事についてキーワードを設定し、その出現で同様に行う。Ⅳ類については写本で共通する画人の出現順序の(順位相関-1)を写本間の類似度として適用する。
- (4) 5の画人録は、中国画論書『図絵宝鑑』に準拠している事をみる。

この(1)前半により、1,2が大永3,4年の宗珠伝書と認められ、(2)前半により3もまた宗珠伝書と判断される。そして(1,2)後半と(3,4)により、伝書5はその全体を宗珠伝書とみることは困難であり、画人録・彫物・土物を取りはずした「座敷飾」部、即ち伝書7の部分ならば宗珠伝書の可能性があることになる。

3. 諸本近親性と成立時期

大谷大学所蔵〔大谷大 b〕は、大永4年奥書『君台観左右帳記』画人録の天文5年が確実な書写奥書に引き続いて書写されており、宗珠から朝倉景職（天文4年歿）宛の大永4年6月3日奥書をもつ。本件は『君台観左右帳記』全体での最古写本である。

内閣文庫蛭川家文書に含まれる〔宗珠蛭川〕は、宛先のない大永3年1月28日の宗珠奥書をもつ。蛭川親世（親俊）の自筆は間違い無いとされるが、端裏に「道哉」とのみ記され、書写時期は明らかでない。

この2本に共通する「彫物」の記載は簡明な記述で一見して類似している。そこで『君台観左右帳記』諸本における記載をキーワードの出現を基準にして数量化Ⅲ類で比較すると図1となる。ここで「別置 永正8」などは、写本〔別置〕の原本成立年度が永正8年と推定されていることを表している。

なお、実際の分析は諸種の基準に基づく散布図を用い、各々少なくとも3軸までは検討する。以下では簡単な為の為に代表的な1-2軸の散布図のみ示し、2軸までと3軸までの累積（修正）寄与率を付記する。またキーワードは例えば次の条文中

ひつかうの事 地に水 なみなどほりて 又わちがへほり入（中略）屋体 人形など

のように枠で囲ったものを設定する。

この結果によれば〔大谷大 b〕と〔宗珠蛭川〕はよく近接しており、また相阿彌による大永3年の一群とも共通性が有る。よってこの2件は宗珠によるものと判断してよく、双方の年紀は信じ得る。但し、相阿彌による永正年間の初期・中期ものとはかなり違いがあり、この内容が能阿彌--珠光--宗珠と伝承されたものとは言い難い。

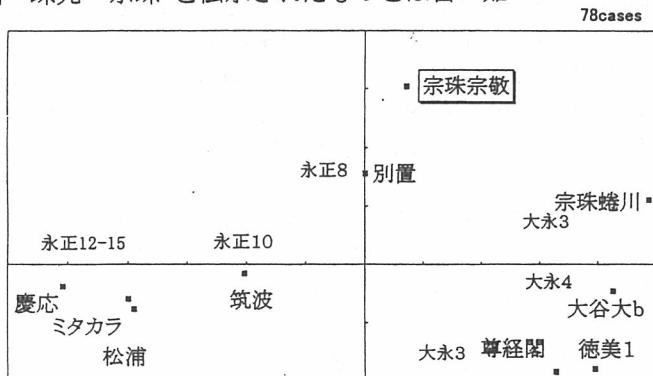


図1. 彫物部諸本の数量化Ⅲ類による比較（地色を無視. 寄与率45.9,61.7%）

Fig.1 Comparison about the description on laquer wares by quantification III

〔茶湯図〕は江戸写本であるが〔宗珠蛭川〕と共通する記載が多く（特に天目・茶碗の部）、さらにその葉茶壺・台子に関する事項は、〔古伝書〕とも共通する内容が多い。共々戦国期の内容と見ることに不都合はない。さらに〔茶湯図〕は名物道具の図示解説があり、一部の道具に関してはその所蔵者を記載する。特に「まつほ（茶入）」を天文18年に戦死した三好宗三所持と記載している。即ち、道具所蔵者名から原本成立期を比定する方式では天文18年以前となるのだが、多少の情報の齟齬で余裕を考えても永禄頃になると見ることは可能である。これらの所蔵者名を戦国末期の名物記『清玩名物記』（書名はもとより後世のものである）と比較すると表2の様によく一致している。（「清玩名物記」から天正期の名物記を

経て「山上宗二記」に至る「天正名物記の系譜」に関しては追って発表の予定である。）

	[茶湯図]	[清玩]
ならしは (文琳)	大和筒井	(玉垣文琳は 能阿-筒井-安井美作守)
るいさ	堺の油屋	堺油屋常言
竹の子くわひん	佐々木六角殿	伊勢善山 今三好宗三 今六角殿
みやうけんかうし	天王寺屋	堺宗達
たいこつほ	淡路屋宗和	堺淡路屋宗和
まつほ	三好宗三	三好宗三 今堺花田屋宗慶

表2. 「茶湯図」と「清玩名物記」における所蔵者記載の比較

Table 2. Comparison of owners of tea utensils in "Chanoyu-zu" and "Seigan-meibutsuki"

これに対して、これまで宗珠本とされてきた一連の「宗珠宗敬本類」は、彫物の解説が[宗珠蝸川][大谷大b]とかなり異なっていることが図1から解る。さらに土物は[宗珠蝸川][茶湯図]と全く異なる。よって、彫物・土物の部は少なくとも大永頃の成立ではない。

また、「宗珠宗敬本類」中国人画家からなる画人録を含んでいる。それは画人の選択では『君台観左右帳記』初期と類似することは図2からわかり、またその記事の記載内容も図3によれば初期と類似している。ここで記事のキーワードは

李竜眠 宋人 仏像 人物 山水 馬 すみ絵もあり

のように採択する。ここで「宋人」は伝記的事項、「すみ絵もあり」は彩色の注記であり、それらを取り除いたものを「画題」とよぶ。「画題」と「彩色注記」を「画事」とよぶ。下記は記事全体での処理結果であるが、「画題」「画事」に制限してもほぼ同様な結果をうる。即ち、左上に初期前期のもの、中央下に後期のもの、右に初期後期から中期と「大谷大」が纏まっている。なお「撮壤集」は古い画人録ではあるが他本とは性格が異なる。

ところが全体の画人記載順序は他本と著しく相違することが、(1 - 共通部分順位相関)を写本の間で相違度と見なして数量化IV類で処理した図4から解る。この図では、宗珠宗敬本があまりに順序が特殊なために、第一軸はほとんどその寄与で尽くされており、他本は第二軸方向に分離している。

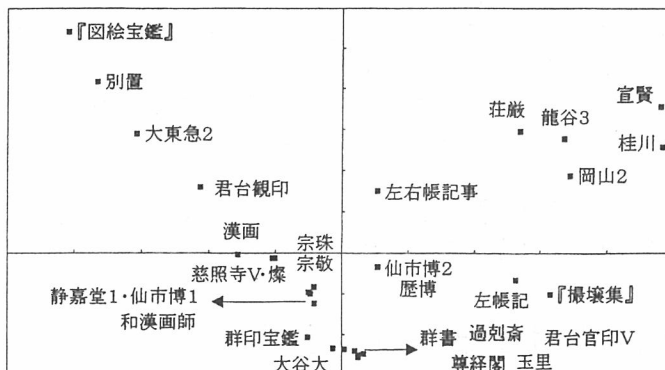


図2. 画人録の内181人の数量化III類散布図 (寄与率33.8, 44.1%)

Fig. 2. Configuration of the list of painters by quantification III

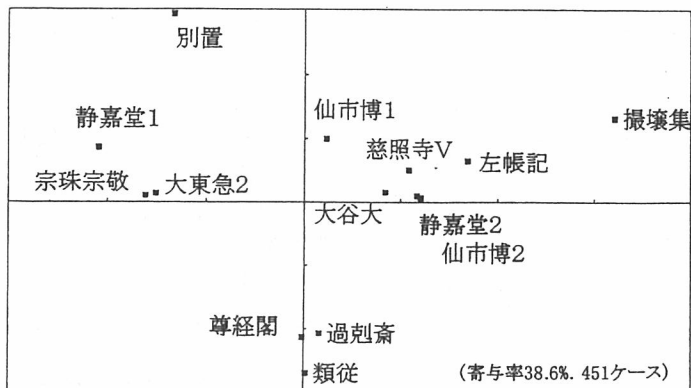


図3. 画人録（上筆）記事数量化Ⅲ類散布図（寄与率 38.6, 51.3%）
 Fig 3. Configuration of lists by explanation about first class painters

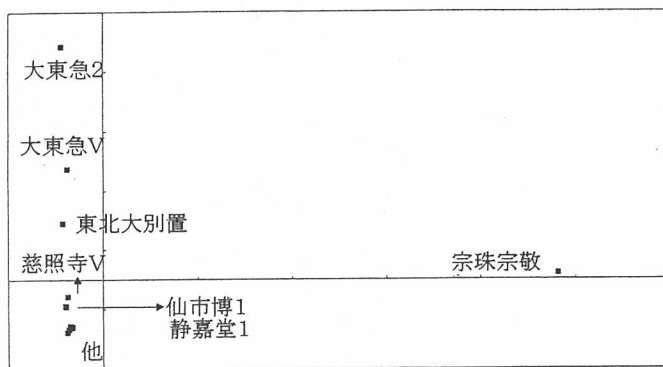


図4. 画人録順位相関数量化Ⅳ類散布図（寄与率 41.6, 56.1%）
 Fig 4. Configuration of lists by order relations on the intersection

これによれば、[宗珠宗敬]の画人録は少なくとも相阿彌による一連のものとは考え難い。しかし単純な合成本ではない。中国画論書『図絵宝鑑』との画人上中下各部分での順位相関を元にして乖離度を定義すれば（数値が小さいほど順序が『図絵宝鑑』に準拠している）、上中においてはその値が0であることから『図絵宝鑑』を積極的に利用して記載順序を揃えていることが判明する。そのようなことを宗珠が行うとは考えがたい。

結局宗珠のものとして多少とも信じるのは天文13年の奥書を持つ座敷飾りのみの[杏雨]であろう。いずれにせよ、[宗珠宗敬]の大永3年2月吉日年紀は信じがたい。

以上の考察により、[大谷大b] [宗珠蜷川]こそは大永3-4年の宗珠伝書として相応しく、[茶湯図]もその流れを汲むものと考えうるに至った。

4. 大永天文期における葉茶壺の分類

宗珠伝書の史料性が保証される効果は大きい。ここでは一例として「葉茶壺」に関する従来の見解に対する補足を行いたい。1970年代になって、それ以前の桑田忠親による見解の

組織的な修正が徳川義宣によって行われた（〔徳川 82〕並びにその参考文献）。しかし、断片的な資料を総合しているため、「真壺」とは葉茶壺の総称名であるのか、分類名称であるのかは今一つ明らかでなかった。

ここで、〔宗珠蝸川〕並びに〔茶湯図〕における葉茶壺の解説を整理すると、図5を得る。但し名物「金花」は『清玩名物記』、『鳥鼠集』（ちょうそしゅう）から補充した。

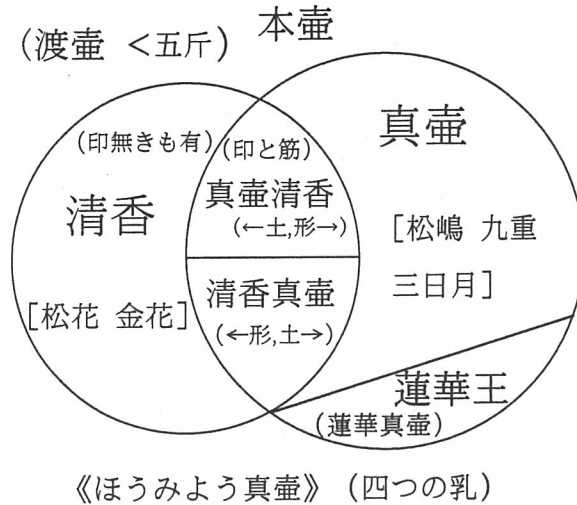


図5. 戦国末期における葉茶壺の分類名称

Fig 5. Classification of tea leaf bottles in the late Muromachi period

〔宗珠蝸川〕は「はちやつほ」の種類として、真壺・清香・真壺清香・蓮華王を記載する。特に「真壺清香」又〔茶湯図〕における「清香真壺」という用語は、真壺が総称名であったならば意味の無い熟語である。天文末期のものかと言われる『茶具備討集』においても、「葉茶壺 真壺 蓮華王 清香」と記しており、真壺は清香と併記されるべき、葉茶壺の一種と捉えられている。

「真壺（まつぼ）」という用語は「清香（せいごう）」と対立する意味合いで使われていたと判断され、その共通部分にあたる用語も存在した。これは「真壺は総称名である」という意見〔徳川 82〕とは若干異なる。戦国末期の総称名はあくまでも「葉茶壺」であったと考えられる。もとより、寛永3年刊本茶書『草人木（そうにんぼく）』冒頭のように、「真壺」が総称名に流用された例はある。

なお、渡壺（わたしつぼ）の意味に関しては、これまで〔古伝書〕が唯一の古史料とされていたが、今回の宗珠伝書確定により、更なる補足を行いうる。

〔宗珠蝸川〕 ころは五斤より下は、四斤にても三斤にても、是を渡し壺と申候

〔茶湯図〕 五きんよりうちなるつほを、わたしつほといふ也

〔古伝書〕 一、わたしの比の事 四きん、三きんまではよき比にて候

〔宗珠蝸川〕は、名物「松嶋、三日月、九重、松花」を、又分類名「蓮華王」を記載する堅実な最古（大永3年正月28日宗珠奥書）の茶湯文書と言えよう。

5. 柳営御物

この数量的分析は、柳営御物の研究においても応用される。これまで江戸初期の柳営御物（徳川幕府所蔵品）に関しては万治3年刊本『玩貨名物記』の記載と、諸記録に見える茶会・献上下賜記載に頼っているのが実状であった。しかし、これは幾つかの問題を含んでいる。第一に、『玩貨名物記』はどのような原本に基づいた物かの研究がこれまで無く、さらに御物の部は品名が羅列されるのみであって献上者の附記も無く、同名異物の多く存在する茶道具においては何を指している物かは推定によっていた。第二に、単に献上・下賜の記録では、その品がどのような評価を受けていたのかは解からず、御物としての「列品録」を元に検討する事がどうしても必要である。既に筆者は正保元年から明暦3年までの上級御物の流れについて決定した〔矢野 99〕。それをさらに拡張して、大御所秀忠薨去の寛永9年の上級御物目録と思われる台帳が、実際にその土用の風干に作成されたと判断できることを示しうる。これによって、家光期から明暦3年迄の上級柳営御物 225 件の納められていた長持並びに献上者を特定することができる。なお、家光期御物台帳に関しては、寛永 14--15 年頃の物があればより充実する。

6. おわりに

数量化Ⅲ・Ⅳ類の援用によって、従来明らかでなかった宗珠伝書の正しい姿が判明した。またこの手法は様様な伝書の研究に応用できると考えられる。宗珠伝書はまだ不足しており、新たな写本の発見が望まれる。

謝辞

竹内順一（東京芸術大学美術館教授、元五島美術館学芸部長）並びに田中秀隆（大日本茶道学会副会長、慶応義塾大学・学習院女子大学講師）両氏には、調査研究でお世話になった事を感謝したい。

本論考は、平成 9-10 年度文部省科学研究費特定領域研究「人文科学とコンピュータ」（代表：及川昭文）数量的分析部門（代表：村上征勝）の助成、並びに、財団法人三徳庵（理事長：田中仙翁）平成 11 年度茶道文化学術助成金に基づく研究の一部として行われた。

参考文献

- 〔矢野 99〕 矢野環：君台観左右帳記の総合研究 -茶華香の原点-江戸初期柳営御物の決定-，勉誠出版（1999）。
〔徳川 82〕 徳川義宣：茶壺，淡交社（1982）。

矢野 環 正会員

昭和 24 年京都生。昭和 52 年京都大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得中退。理学博士。平成 6 年より埼玉大学教授（理学部数学科）。

特異点論，代数解析学等の研究に従事。芸道伝書の数理的扱いに興味を持ち，君台観左右帳記，華道伝書，名物記の研究を行う。日本数学会，儀礼文化学会，茶湯文化学会各会員。